

SETOUCHI ARCHITECTURE JOURNAL

瀬戸内アーキテクチャージャーナル ドッツ

DOTS

NOVEMBER 2014 vol.2

特集 | 松山、木子七郎の建築を巡る。

TAKE
FREE

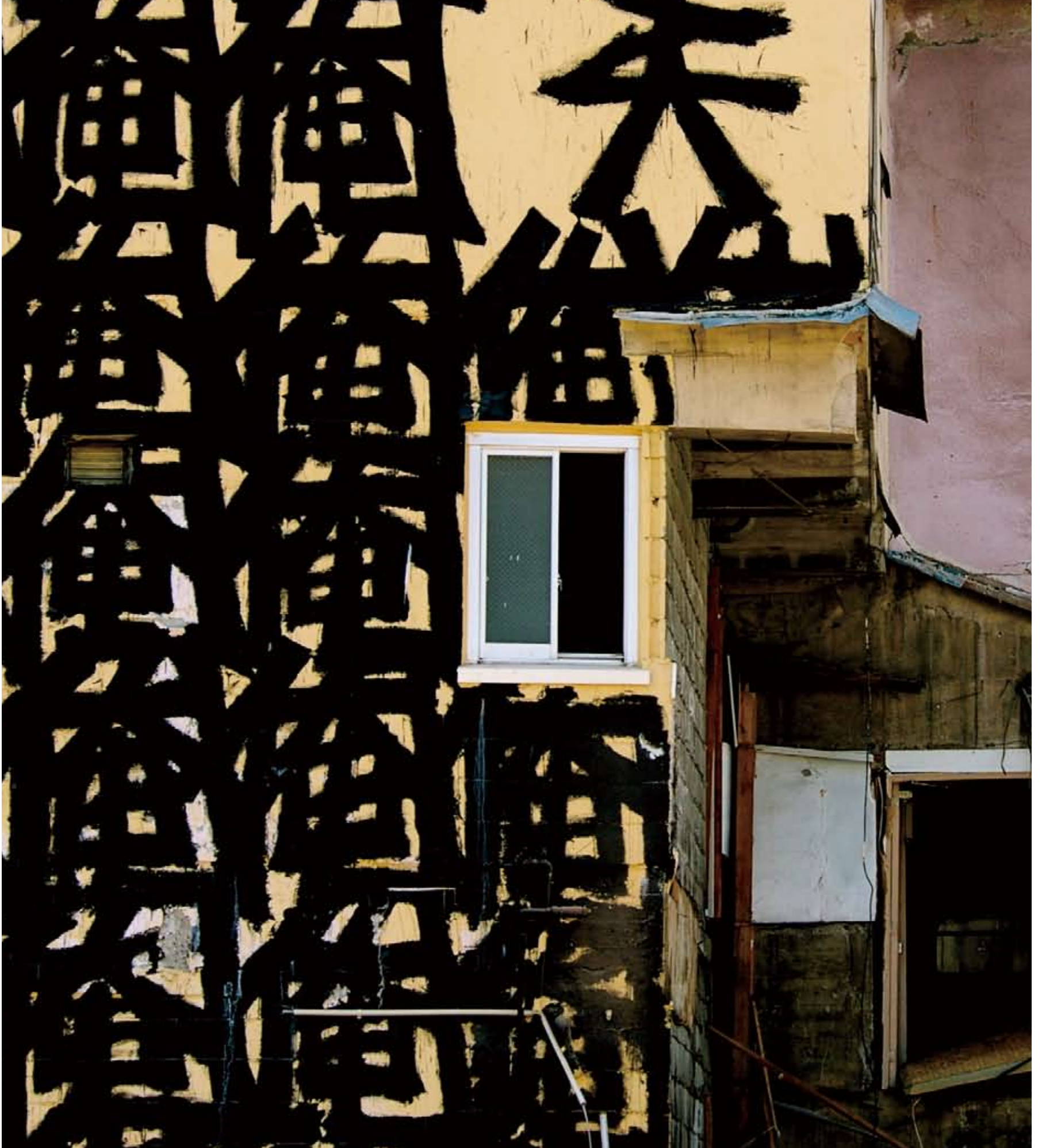
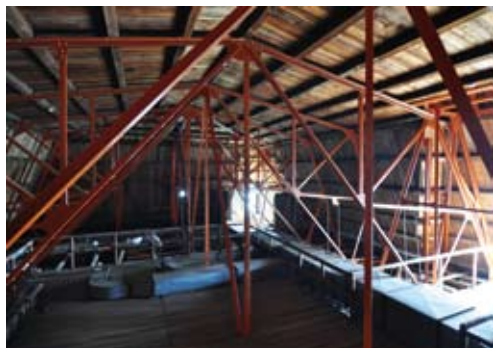


photo: isado

松山、木子七郎の建築を巡る。

上 玄関扉の鳳凰の模様。建物には内外部ともに精緻な装飾が施されている。優れた職人が携わっていることを想像させる。

下 普段は非公開の小屋裏。主に倉庫として用いられていたようである。[編]



愛媛・松山。街の中心部に位置する萬翠荘は、宮廷建築家として活躍した名門木子家に生まれた在阪の建築家、木子七郎が設計を行った建築で、2011年には重要文化財に指定されました。松山には萬翠荘のほかにも、木子七郎の手がけた建築が残っています。

今号では、萬翠荘の修復に携わった建築家・花岡直樹さんにご案内いただきながら、松山の「木子建築」をめぐるります。

木子七郎ってどんな建築家ですか？

木子七郎さんは明治17年（1884）生まれで、東京帝国大学、現在でいう東大の建築学科を卒業しています。木子七郎のお父さんは清敬という名前で、京都の京大工の棟梁として京都の御所や明治宮殿の造営にも奉仕されたそうです。木子七郎は松山で多くの建物を手掛けていますが、それは松山の実業家・新田長次郎の長女のカツさんと木子さんが結婚したことで松山に出入りがあったからです。木子七郎に一目惚れしたカツさんの方からアタックしたそうです。松山に現存しているのは四棟で、萬翠荘、愛媛県庁舎、鎌谷カナ頌功堂、石崎汽船旧本社ビル。現存していないものには、伊豫農業銀行湊町出張所、大丸百貨店ゲストハウス、松山高等商業学校旧本館、愛媛県立図書館、子規堂などが挙げられます。子規堂は空襲で焼けてしまいましたが、ほぼ同じ形で建て直したそうです。現在の松山市役所の場所にも、木子七郎の手掛けた旧松山市庁舎がありました。

萬翠荘

萬翠荘を一言で表すとすれば、愛媛県で「一番最初に一番いい建物を建てた」ということです。愛媛県で最初に建てられた鉄筋コンクリート造の建物であり、最初にできた本格的な洋館です（大正11年（1922）竣工）。萬翠荘は大正時代当時のお金で30万円かかったそうで、現在の金額に換算すると約19億円になるそうです。延床面積が約300坪ですから、坪単価になると633万円。一般的な住宅なら坪60万も出せばいいものですが、その10倍だということです。でも、今では手に入らない材料や、再現の不可能な技術もありま



花岡直樹 はなおかなおき

1958年愛媛県生まれ。建築家（株）花岡直樹建築事務所代表取締役。萬翠荘の修復工事における設計・監理を担当。



石崎汽船旧本社ビル | 創業150年を超える海運業者、石崎汽船。その本社として、1924年から2013年まで使われた。事務所専用の建物として建てられたのも当時としては珍しい。三津浜の隆盛を物語る建築。[編]



鍵谷カナ頌功堂 | 松山で製造される伊予緋は、江戸時代後期に鍵谷カナが独自に生み出した。その遺徳を偲び建てられた頌功堂に頑丈な鉄筋コンクリート造が採用されたのは、カナの功績を永く伝える意図があったともされる。[編]

すので、それだけのお金をかけてもできないかもしれない。それくらい貴重な建物です。屋根の薄い緑色に見える部分は銅板で、緑青を吹いています。窓飾りもそうですね。そり立つ黒い屋根は、天然スレート。宮城県石巻市雄勝産の、2億5千万年前に堆積した粘板岩(玄昌石)を、約4.5〜5.5ミリの板に削いでいく。それをうるこ型に切って葺いているんです。近年、丸の内東京駅舎が復原されましたが、そのドーム屋根も同じ雄勝産の天然スレートですね。壁面の白い部分は、大正時代のタイル貼り。近くでよく見ると、タイルの間の目地が膨らんでいるのが分かります。窓の周りや玄関の車寄せの上のバルコニーなど、少しグレーに見える壁は、洗い出し仕上げです。モルタルに小さい白と黒の石の粒を混

ぜたものを壁に塗るんですが、乾ききる前に表面のセメントを落とすことで石の粒が見えてくるんです。それで洗い出しというんですが、石の粒の表面をよく見てみると、平らな面が全部こちらを向いているでしょう。塗り付けただけではバラバラな方向を向いているんですが、洗う前に表面を叩くと、平らな面が正面を向くんです。細やかな仕事ですね。玄関扉には青銅の鋳物の飾りがありますが、久松家の「梅鉢」の紋と鳳凰がデザインされています。

見ると鉄骨がたくさん三角形を作っているのが分かります。中学校で習った「三角形の合同条件」の中に、三辺の長さが等しければ合同というものがあつたでしょう。鉄骨を三角形に組むことで、動かなくなるんです。頑丈な構造なんです。

石崎汽船旧本社ビル

「木子七郎は洋風建築だけではなく、和の美学にも長けているんですね」

いますが、よく見ると真ん中の三列だけが前面に張り出して、柱型を付け、柱頭飾りが施されています。黄色いタイルも貼られていて、真ん中を強調して作られたことが分かります。両側の白いタイルは萬翠荘の外壁と同じ、真ん中の黄色いタイルは、松山地方気象台(旧愛媛県立松山測候所)に使われているものと同じものだと考えられています。予算が厳しい中にも、ちよつとしたバルコニーが付けられていたり、玄関の上を洋風に飾ったりと、できる限りの様々な工夫を施したことが分かりますね。

鍵谷カナ頌功堂

鍵谷カナ頌功堂は、伊予緋の創始者である鍵谷カナの功績を称えるために昭和4年(1929)に建てられました。構造は鉄筋コンクリート造。萬翠荘や愛媛県庁舎とはちよつと毛色の違う建物ですね。八角形の平面で、円柱が八本あります。この柱はエンタシスといって、真ん中が膨らんで上が細くなっています。バランスがいいし、見上げると上が細く見えるので、より高く見えるんです。柱の上部が丸くなっているのが分かりますか? 少しマニアックな話ですが、日本のお寺の柱の上部を丸めるのは、禅宗様という鎌倉時代に宋から輸入された建築様式です。木子七郎のお父さん、清敬は京大工の棟梁でしたが、木子七郎は洋風建築だけではなく、和の美学にも長けているんですね。少し離れたと、屋根の出具合や反り具合といい、日本の建築を理解してないといけないデザインではないかと思えます。木子七郎は和・洋ともできるという稀有な才能を持つ建築家として慕われたようです。

10月18日に行われた見学会「木子七郎建築探訪」(主催:愛媛日仏文化交流会)を基に構成。

構成 | 白石卓央



愛媛県庁舎 | ドームを中心に左右対称の形に建てられた、4代目の愛媛県庁舎。扉やアーチ窓の周りなど、いたる所に細やかな装飾が施されている。スタンドグラスや、ドームへ至る艶かしい螺旋階段もみどころ。[編]

人口51万人を超える愛媛県松山市。この地には道後温泉をはじめ、権現温泉、星乃岡温泉など上質であたたかな温泉がいくつも湧き出しています。しかし松山の誇るべき「湯」は決して温泉だけではありません。地域の人々と共に歩んできた「銭湯」もまた松山を象徴する湯文化であり、そこにはあたたかな空間が広がっています。

戦火を免れた地域の銭湯

松山市内には現在15軒*1の銭湯があり、昭和レトロな風情を今に伝えています。市内最大の商店街・大街道を抜けて10分ほど歩いた素鷲地区にある「祇園湯」もそのひとつです。この地区は戦時中空襲による被害を免れた地域で、車1台がやっと通れるくらいの小路に趣きのある民家が軒を連ねています。「昔はねえ、この地区にはほんとにたくさんのお湯があったんだよ」そう懐かしみながら話すのは祇園湯2代目の女将宮尾光恵さん。父・博視さんが建てた祇園湯を先代から受け継ぎ守り続けています。



番台の片隅にある女将さんの「銭湯ノート」。湯加減の調整や掃除の注意事項、お客さんからの意見などがびっしりと書き留められている。



祇園湯（ぎおんゆ）
OPEN 15:00～21:00（日曜定休）
愛媛県松山市祇園町9-23
入浴料 400円（大人）

祇園湯の創業は昭和38年。2階建てで、1階が銭湯、2階が居住スペースとなっています。銭湯は入口からすぐに男湯と女湯に分かれていて、長めの暖簾をくぐると低めの番台があり、脱衣所・浴室とも実用性を重視した開放感のある空間が広がっています。女将さんの優しい人柄を象徴するかのように、室内はいつも常連さんたちの和やかな声が響いています。

*1 松山市浴場協同組合調べ

「円型浴槽」の程好い距離感

祇園湯の特徴は、なんといっても可愛らしい「円型浴槽」。東京など関東では珍しいこの円型は、入浴すると他の人と体が向き合い（目が合う）ので最初は気恥ずかしいのですが、慣れると程好い距離感がコミュニケーションを円滑にさせてくれます。「今日は暑かったのう」「そろそろ秋刀魚が出てくるのう」と何気ない日常会話に花が咲くその光景は、まるでちやぶ台を囲んで談笑する家族のようです。また、昭和30年当時のタイルも見どころです。正面入口の外壁もさることながら、番台の側面、浴槽、シャワー付近ゆるやかなアーチを描く浴室天井など至る所にそれぞれ異なる多彩なタイルが使われており、当時の職人の丁寧な仕事ぶりや設計者の繊細なセンスを感じずにはいられません。

銭湯の「円柱」と道後温泉

一方、銭湯の外観では「円柱」が圧倒的な存在感を放っています。実際には構造上の柱ではなく円柱のように眺められた壁ですが、市内にはこの「円柱」を設けた銭湯が祇園湯のほかにも見られます。当時の流行りだったのかもしれないし、同じ設計者によるものだったのかもしれない。なぜ円柱なのか、そう考えてふと思ひ出されたのが、

道後温泉の「湯釜」です。湯釜というのは石で造られた温泉の湧出口（湯口）のことで、道後温泉では千年以上も絶えることなく湯を噴出していた湯釜が「湯釜薬師」として大事に祀られています。設計者亡き今、「円柱」デザインの真意は分かりませんが、銭湯の末永い繁栄や湯への奉謝、道後温泉へのオマージュとしてこのシンボリックな形を真正面に据えたのではないかと考えると妙に合点がいくのです。

松山の湯文化

松山の銭湯には、清水をイメージさせる富士山のペンキ絵や絢爛豪華な装飾は殆どありません。そうした派手さや華やかさはないけれど、湯文化とともに育まれてきたあたたかく慎ましい生き方とその精神があり、そうした地域性を銭湯建築の隅々から感じ取ることができるのです。そして今も銭湯に集い交流を深める人々の姿からは、場が織り成す地域コミュニティの大切さについて改めて考えさせられます。



編集後記：『道後装飾事典』について

11月1日（土）に、道後温泉本館のある松山・道後地区にて、街歩きと執筆からなる『道後装飾事典』ワークショップを開催しました。

『道後装飾事典』は、道後の建物や街並み、路上で見つけた装飾やデザインなど、参加者の路上での「発見」を写真と文章で表現するワークショップです。当日は子規記念博物館をスタートし、道後温泉本館や伊佐爾波神社をはじめ、普段はあまり入ることのない道後の旅館なども含めたルートを散策。街歩きの中で雨が降るといったコンディションでしたが、参加いただいた約20名の方々のおかげで、写真と原稿にまとめられました。



2015年1月に印刷・配布予定です。配布については、フェイスブックやウェブサイトででもお知らせしますので、チェックしてみてください。今後もしつづつではありますが、松山を中心とした様々な場所や建築、それぞれの文化や物語をていねいに発掘し、伝えていくことができると考えています。活動・支援メンバーも募集しています。

DOTS vol.2

2014年11月発行

著者 瀬戸内アーキテクチャーネットワーク
協力 NPO法人クオリティアンドコミュニケーションオプアーツ
愛媛日仏文化交流会
発行人 白石卓央
発行所 瀬戸内アーキテクチャーネットワーク
790-0923 愛媛県松山市北久米町 912

※このフリーペーパーは、『坂の上の雲』フィールドミュージアム活動支援事業の助成を受けて発行しています。

Setouchi Architecture Network All rights reserved
www.setouchi-archinet.com
setouchiarchinet@gmail.com

SETOUCHI
ARCHITECTURE
NETWORK